

『稽山承語』朱得之述（二） 二二〇～三四条訳注

水野 実・永富 青地・三沢三知夫

【三】

天理人欲甚精微。自家工夫不可放過、不可影過、不可混過。

〔訓読〕

天理・人欲は甚だ精微なり。自家の工夫は放過すべからず、影過すべからず、混過すべからず。

〔語釈〕

○天理・人欲 『礼記』楽記の一節に基づく対概念。「天理」は天地自然の道理。「人欲」は人の欲心。

○精微 みえにくくわかりにくいこと。

○自家 自己。

○放過 それでよいとしてほっておく。自由にやらせておく。「過」は行為の継続を表す。（入矢義高監修、古

賀英彦編著『禪語辭典』思文閣、一九九一

○影過 表面をつくりごまかしておいておくこと。

○混過 混ぜたままにしておくこと。

〔校異一〕

「狩野文庫本」（吉田氏所蔵本）との字句の相違はない。

【三三】

一日師曰、四方英賢來、此相依共明此學。豈非此生至樂。然某見一人來、心生一喜又添一憂。喜在吾道之遠及。憂其人或言之未瑩以啓人之疑、行之未篤以來人之謗。疑謗一興阻喪向善之誠者多矣。諸君宜相体以求自立也。

〔訓読〕

一日師曰く、四方の英賢來たるは、此れ相ひ依り共に此の學を明らかにす。豈に此れ至樂を生ずるに非ずや。然るに某一人の來たるを見るに、心に一喜を生じ又た一憂を添ふ。喜びは吾が道の遠く及ぶに在り。其の人或いは之れを言ふこと未だ瑩らかならずして以て人の疑ひを啓き、之れを行ふこと未だ篤からずして以て人の謗りを來たすを憂ふ。疑謗一たび興らば善に向かふの誠を阻喪する者多からん。諸君宜しく相ひ体し以て自ら立

つを求むべきなり、と。

〔語釈〕

○至楽 最高の楽しみ。『莊子』至楽。

○自立 『礼記』儒行。

〔校異〕

「狩野文庫本」（「吉田氏所蔵本」）との字句の相違はない。

【二四】

問喜怒哀楽。師曰、樂者心之本体也。得所樂則喜、反所樂則怒、失所樂則哀。不喜不怒不哀時、此真樂也。

〔訓読〕

喜怒哀楽を問ふ。師曰く、樂は心の本体なり。樂しむ所を得れば則ち喜び、樂しむ所に反すれば則ち怒り、樂しむ所を失へば則ち哀しむ。喜ばず怒らず哀しまざる時、此れ真樂なり、と。

〔語釈〕

○喜怒哀楽 『中庸』首章。

○樂者心之本体也 『伝習録』中巻陸原静に答ふる書(第二書)に「樂は是れ心の本体なり。七情の樂に同じからずと雖も、而も亦た七情の樂に外ならず。則ち聖賢は別に真樂有りと雖も、而も亦た常人の同じく有する所なり」とある。これを承けて『伝習録』下巻九二条では「樂は是れ心の本体なり、と。知らず、大故に遇ひて哀哭する時に於ても、此の樂還は在りや否や、と」という問いが王守仁に対してなされている。

〔校異一〕

「狩野文庫本」(吉田氏所蔵本)との字句の相違はない。

〔校異二〕『明儒学案』巻二五、「明経朱近齋先生得之」の「語録」三条)

○師 「語録」では「陽明先生」に作る。

【二五】

楊文澄問、意有善惡。誠之將何稽。師曰、無善無惡者心也、有善有惡者意也、知善知惡者良知也、為善去惡者格物也。曰、意固有善惡乎。曰、意者心之發。本自有善而無惡。惟動於私欲而後有惡也。惟良知自知之、故學問之要曰致良知。

〔訓読〕

楊文澄問ふ、意に善惡有り。之れを誠にせんとすれば何を將て稽(いた)らん、と。師曰く、善無く惡無きは心なり、善有り惡有るは意なり、善を知り惡を知るは良知なり、善を為し惡を去るは格物なり、と。曰く、意は固より善惡有るか、と。曰く、意は心の發なり。本と自ら善有りて惡無し。惟だ私欲に動きて後惡有るのみ。惟だ良知のみ自ら之れを知る、故に学問の要は致良知と曰ふ、と。

〔語釈〕

○楊文澄 未詳。

○無善無惡者心也、爲善爲惡者格物也 『伝習録』下卷一一五条に「善無く惡無きは是れ心の体、善有り惡有るは是れ意の動、善を知り惡を知るは是れ良知、善を為し惡を去るは是れ格物なり」とある。

〔校異一〕

「狩野文庫本」(「吉田氏所藏本」)との字句の相違はない。

〔校異二〕『明儒学案』卷二五、「明経朱近齋先生得之」の「語録」(四条)

○師 「語録」では「陽明先生」に作る。

○無善無惡者心也、爲善爲惡者格物也 「語録」では「無善無惡者格物也」に作る。

【二六】

或問三教同異。師曰、道大無外。若曰各道其道、是小其道矣。心学純明之時、天下同風、各求自盡。就如此序事元是統成一間。其後子孫分居、便有中有傍。又伝漸設藩籬、猶能往来相助。再久来漸有相較相争、甚而至於相敵。其初只是一家。去其藩籬仍旧是一家。三教之分亦只似此。其初各以資質相近処学成片段。再伝至四五則失其本之同、而從之者亦各以資質之近者而往。是以遂不相通。名利所在至於相争相敵、亦其勢然也。故曰、仁者見之謂之仁、知者見之謂之知。纔有所見便有所偏。

〔訓読〕

或ひと三教の同異を問ふ。師曰く、道大にして外無し。若し各々其の道を道とすと曰はば、是れ其の道を小とするなり。心学純明の時、天下風を同じくして、各々自ら盡くすを求む。就ち此の序事元と是れ一間を統成するが如し。其の後子孫分居すれば、便ち中有り傍有り。又た伝へること漸くにして藩籬を設くるも、猶ほ能く往来し相ひ助く。再び久しく来たること漸くにして相ひ較べ相ひ争ふこと有り、甚だしくして相ひ敵するに至る。其の初めは只だ是れ一家なり。其の藩籬を去れば仍ち旧と是れ一家なり。三教の分も亦た只だ此れに似る。其の初め各々資質の相ひ近き処を以て学び片段を成す。再び伝ふること四五に至れば則ち其の本の同じきを失ひて、之れに従ふ者も亦た各々資質の近き者を以て往く。是を以て遂に相ひ通ぜず。名利の在る所相ひ争ひ相

ひ敵するに至るも、亦た其の勢の然らしむるなり。故に曰く、仁者は之れを見て之れを仁と謂ひ、知者は之れを見て之れを知と謂ふ、と。纔かに見る所有らば便ち偏る所有り、と。

〔語釈〕

○斤事 敷地。

○藩籬 かきね。竹を編んで家の周囲にめぐらしたものの。

○片段 全体の中の一段落、切れ端、一こま。

○仁者見之謂之仁、知者見之謂之知 『易』繫辭上。

○なお『王文成公全書』卷三四、年譜三の嘉靖二年の条に「後世の儒者は聖学の全を見ず。故に二氏と二見を成すのみ。之れを譬ふるに、斤堂三間、共に一斤と為す。儒者は皆な吾が用ふる所なるを知らず、仏氏を見れば則ち左辺の一間を割きて之れに与へ、老氏を見れば則ち右辺の一間を割きて之れに与へ、而して己は則ち自ら中間に処る。皆な一を挙げて百を廢するなり」とある。

〔校異一〕

「狩野文庫本」（吉田氏所蔵本）との字句の相違はない。

〔校異二〕（『明儒学案』卷二五、「明經朱近齋先生得之」の「語録」七条）

○師 「語録」では「陽明先生」に作る。

○道大無外 「語録」では「道大無名」に作る。

○三教之分亦只似此 「語録」では「似」を「如」に作る。

【二七】

童克剛問、伝習録中以精金喻聖、極為明功。惟謂孔子分兩不同万鎰之疑、雖曾有軀殼起念之說、終是不能寂然。師不言。克剛請之不已。師曰、看易經便知道了。克剛必請明言。師乃嘆曰、蚤知如此起疑生辨。當時便多說這一千也得。今、不自煅煉金之程色、只是問他人金之輕重奈何。克剛曰、聖若蚤得聞教、必求自見。今老而幸游夫子之門、有疑不決、懷疑而死終是一憾。師乃曰、伏羲作易、神農黃帝堯舜用易。至於文王演卦于羑里、周公又演爻於居東。二聖人、比之用易者似有間矣。孔子則又不同。其壯年之志只是東周。故夢亦周公。嘗曰、文王既沒、文不在茲乎。自許自志、亦止二聖人而已。況孔子玩易、韋編乃至三絕、然後嘆易道之精曰、假我數年、五十以學易可、以無大過。比之演卦演爻者更何如。更欲比之用易如堯舜、則恐孔子亦不自安也。其曰、我非生而知之者、好古敏以求之者。又曰、若聖与仁則吾豈敢。抑為之不厭。乃其所至之位。

〔訓読〕

童克剛問ふ、『伝習録』中、精金を以て聖に喩ふるは、極めて明功と爲す。惟だ孔子の分兩を謂ひて万鎰に同じからざるの疑ひ、曾て軀殼起念の説有りと雖も、終に是れ寂然たる能はず、と。師言はず。克剛之を請ふこと

已まず。師曰く、『易経』を看れば便ち知道（了）するなり、と。克剛必ず明言を請ふ。師乃ち嘆じて曰く、蚤に知らんとすること此の如くならば疑ひを起こし辨を生ぜん。当時便ち多きこと這の一千と説くも也た得。今、自ら金の程色を煨煉せず、只だ是れ他人に金の軽重を問ふのみは奈何、と。克剛曰く、堅若し蚤に教へを聞くを得れば、必ず自ら見るを求む。今老いて幸ひに夫子の門に遊び、疑ひ有りて決せず、疑ひを懷きて死ぬは終に是れ一の憾みなり、と。師乃ち曰く、伏羲易を作り、神農・黄帝・堯舜易を用ふ。文王に至りては卦を羨里に演べ、周公は又た爻を居東に演ぶ。二聖人、之れを易を用ひる者に比ぶれば間有るに似たり。孔子も則ち又た同じからず。其の壮年の志は只だ是れ東周なり。故に夢みるも亦た周公。嘗て曰く、文王既に没するも、文茲に在らざるか、と。自ら許し自ら志すは、亦た止だ二聖人のみ。況んや孔子の易を玩じ、韋編乃ち三絶に至り、然る後に易道の精を嘆じて曰く、我に数年を假し、五十にして以て易を学べば、以て大過無かるべし、と。之れを卦を演べ爻を演ぶる者に比ぶれば更に何如。更に之れを易を用ふること堯舜が如きに比ぶれば、則ち恐らくは孔子も亦た自ら安んぜず。其の我は生れながらにして之れを知る者に非ず、古を好み敏にして以て之れを求むる者なり、と曰ひ、又た聖と仁との若きは則ち吾豈に敢へてせんや。抑も之れを為（まな）びて厭はず、と曰ふは乃ち其の至る所の位なり、と。

〔語釈〕

○童克剛 名世堅、連城人。陽明弟子。（陳榮捷『王陽明伝習録詳註集評』学生書局、一九九二）

○伝習録中以精金喻聖 『伝習録』上巻一〇〇条に「聖人の聖為る所以は、只だ是れ其の心天理に純にして、

人欲の雜無きのみ。猶ほ精金の精爲る所以は、但だ其の成色足りて銅鉛の雜無きを以てなるがごときなり」とある。

○惟謂孔子分兩不同万鎰之疑、雖曾有軀殼起念之說、終是不能釈然 『伝習録』上卷一〇八条に「徳章曰く、先生の精金を以て聖に喩へ、分兩を以て聖人の分量に喩へ、鍛練を以て学者の工夫に喩ふるを聞き、最も深切なりと爲す。惟だ堯舜を謂ひて万鎰と爲し、孔子を九千鎰と爲すは、疑ふらくは未だ安からず、と。先生曰く、此れ又た是れ軀殼上に念を起す。故に聖人の替に分兩を争ふ。若し軀殼上従り念を起さずんば、即ち堯舜の万鎰も多しと爲さず、孔子の九千鎰も少なしと爲さず、と」とある。

○知道 知るの意。

○程色 普通より考えれば『伝習録』上卷一〇〇条の「成色」と同じ意と考えられる。「成色」とは金の純度をいう。

○伏羲作易、神農黄帝堯舜用易。至於文王演卦于美里、周公又演爻於居東。 『伝習録』上卷一一條に「伏羲卦を画して自り文王・周公に至るまで、其の間に易を言ふもの、連山・帰藏の属の如き、紛紛籍籍、其の幾くなるかを知らず、易道大いに乱る。孔子は天下文を好むの風、日に盛なるを以て、其の説の將に紀極無からんとするを知り、是に於て文王・周公の説を取りて之れを賛し、以為へらく、惟だ此れ其の宗を得たりと爲す、と」とあり、『伝習録』下卷九三条に「問ふ、良知は一のみ。文王は象を作り、周公は爻に繋げ、孔子は易を賛す。何を以て各自理を看ること同じからざるか、と。先生曰く、聖人何ぞ能く死格に拘（得）らん。大要は良知の同じきに出づれば、便ち各、説を爲すも何の害かあらん、と」とある。「美里」とは文王が殷の

紂王に囚えられた処。「居東」については『尚書』金縢に「周公東に居ること二年、則ち罪人斯に得たり」とあるが、鄭玄は「居東の都」とする。

○故夢亦周公 『論語』述而に「吾復た夢に周公を見ず」とある。

○文王既没、文不在茲乎 『論語』子罕。

○韋編乃至三絶 『史記』孔子世家に「孔子晩にして易を喜び、象・繫・象・説卦・文言に序し、易を読み韋編三絶す」とある。

○假我数年、五十以学易可、以無大過 『論語』述而には「我に数年を加へ、五十にして以て易を学べば以大過無かるべし」とある。

○我非生而知之者、好古敏以求之者 『論語』述而。

○若聖与仁則吾豈敢。抑為之不厭 『論語』述而。「文王既没、文不在茲乎」・「我非生而知之者、好古敏以求之者」とともに、斯文の伝統の繼承を己の任とすることを言明している。

〔校異一〕

○極為明功 「狩野文庫本」（吉田氏所蔵本）では「功」を「切」に作る。

○師乃嘆曰 「狩野文庫本」（吉田氏所蔵本）では「曰」を「田」に作る。

○比之演卦演爻 「狩野文庫本」（吉田氏所蔵本）では「比」を「此」に作る。

○比之用易 「狩野文庫本」（吉田氏所蔵本）では「比」を「此」に作る。

〔校異二〕

『伝習録欄外書』所引との字句の相違は無い。

【二八】

一友問、某只是於事不能了。師曰、以不了了之良知。又曰、所謂了事也有不同。有了家事者、有了身事者、有了心事者。今汝所謂了事蓋以前程事為念。雖云了身上事、其実、有居室産業之思在。此是欲了家事也。若是単单只了身事、言必信、行必果者、已是好男子、至於了心事者果然難得。若知了心事則身家之事一齊都了。若只在家事身上著脚、世事何曾得有了時。

〔訓読〕

一友問ふ、某只是れ事に於て了する能はず、と。師曰く、了了たらざるの良知を以てすればなり、と。又た曰く、所謂事を了するは同じからざる有り。家事を了する者有り、身事を了する者有り、心事を了する者有り。今汝の所謂事を了するは蓋し前程の事を以て念と為す。身上の事を了せんと云ふと雖も、其の实、居室産業の思ひ有ること有り。此れは是れ家事を了せんと欲するなり。若し是れ単单と只だ身事を了するのみなれば、言必ず信、行必ず果なる者にして、已に是れ好男子なるも、心事を了するに至りては果然として得難し。若し心事を了するを知らば則ち身・家の事一齊に都て了す。若し只だ家事・身事上に在りて著脚すれば、世事何ぞ曾

て了する時有るを得ん、と。

〔語釈〕

○了了 あきらかなさま。

○前程 将来成就すべきこと。

○居室産業 土地、家屋などの不動産、資産、財産。

○単単 ただ、わずか。

○言必信、行必果 『論語』子路。

○好男子 りっぱな男、好漢。ここでは、最上ではないが許容はできるものとして用いられている。

〔校異一〕

「狩野文庫本」(「吉田氏所蔵本」)との字句の相違はない。

【二九】

或問客氣。師曰、客與主対。讓盡所対之賓而安心居於卑末。又能盡心盡力供養諸賓、賓有失錯又能包容。此主氣也。惟恐人加於吾之上、惟恐人怠慢我。此是客氣。

〔訓読〕

或ひと客氣を問ふ。師曰く、客は主と対す。対する所の賓に讓盡して心を安んじ卑末に居る。又た能く心を盡くし力を盡くし諸賓を供養し、賓に失錯有るも又た能く包容す。此れ主氣なり。惟だ人の吾の上に加ふるを恐れ、惟だ人の我を怠慢するを恐る。此れは是れ客氣なり、と。

〔語釈〕

○客氣 ふつうはよそよそしくて心がこもっていないという意だが、ここでは修養上、怠慢な気持ちとして用いる。

○怠慢 おこたつてなおざりにすること。

〔校異一〕

「狩野文庫本」（吉田氏所蔵本）との字句の相違はない。

〔校異二〕 『明儒学案』卷二五、「明經朱近齋先生得之」の「語録」五条

○師 「語録」では「陽明先生」に作る。

【三〇】

人之材力自是不同。有能洪大者、有能精詳者。精詳者終不能洪大。如史稱漢高帝雄才大略、大可以該小、略可以該詳可也。謂能提綱挈領也。不然迂疎而已。反不如精詳者雖小自有實用。

〔訓読〕

人の材力は自らは是れ同じからず。能く洪大なる者有り、能く精詳なる者有り。精詳なる者は終に洪大なる能はず。史、漢高帝の雄才大略を稱して、大は以て小を該ぬべく、略は以て詳を該ぬべきが如きは可なり。能く綱を提げ領を挈ぐるを謂ふなり。然らざれば迂疎なるのみ。反りて精詳なる者の小と雖も自ら實用有るに如かず。

〔語釈〕

○材力 材は才。うまれつきの能力。

○洪大 ひろく大きい、大きなさま。

○精詳 くわしく、つまびらかなさま。

○史 『漢書』武帝紀には「武帝の雄材大略の如きは、文・景の恭儉を改めずして以て斯の民を濟ふ」とある。「漢高帝雄才大略」というのは王守仁の記憶違いとも考えられる。

○漢高帝 前漢の高祖、劉邦。

○雄才大略 大なる才能とすぐれた謀。

○提綱挈領 主要な点を把握していること。

○迂疎 世事にまわり遠くうといこと。

〔校異一〕

「狩野文庫本」(「吉田氏所蔵本」)との字句の相違はない。

【三二】

一友初作尹問曰、為尹之道不可輕聽人言。不能不聽人言、逆詐億不信、既非君子之道。如舜之好問好察、何以知人之不我欺也。師曰、只要自家主意明白。主意堅定在我一以愛民為心。誠然如保赤子。凡以愛民之言欺我、我即用之、欺我者乃助我者也。凡以殃民之言欺我、与我主意不合、必不肯聽。又何患聽言之難也。

〔訓読〕

一友初め尹の問ひを作して曰く、尹の道為るや軽しく人の言を聴くべからず、と。人の言を聴かざること能はず、詐りを逆へ信ぜられざるを億るは、既に君子の道に非ず。舜の問ふを好み察するを好むが如きは、何を以て人の我を欺かざるを知らんや、と。師曰く、只だ自家の主意明白なるを要するのみ。主意堅定なれば我に

在りては一に愛民を以て心と為す。誠に然れば赤子を保んずるが如し。凡そ愛民の言を以て我を欺くも、我即し之れを用ふれば、我を欺く者は乃ち我を助くる者なり。凡そ殃民の言を以て我を欺き、我が主意と合せざれば、必ず肯へて聴かず。又た何ぞ言を聴くの難きを患へん、と。

〔語釈〕

○尹之道不可輕聽人言 『尚書』太甲下に「言汝の心に逆ふ有らば、必ず諸れを道に求めよ。言汝の志に遜

ふ有らば、必ず諸れを非道に求めよ」とあるのを念頭においたものか。

○逆詐億不信 『論語』憲問に「詐りを逆へず、信ぜられざるを億らず」とある。

○舜之好問好察 『中庸』六章に「舜は問ふことを好み、邇言を察することを好む」とある。

○主意 考え、構想、定見。

○如保赤子 『大学』齊家章・『尚書』康誥。

○殃民 人民を苦しめること。『孟子』告子下。

〔校異一〕

「狩野文庫本」（吉田氏所蔵本）との字句の相違はない。

【三三】

古人琴瑟簡編莫非是學。板築魚塩莫非作聖之地。且如歌詩一事一歌之間直到聖人地位。若不解良知上用功、縦歌得盡如法度、亦只是歌工之悅人耳。若是良知在此歌、真是瞬息之間邪穢蕩滌、渣滓消融、直与太虚同体。方是自慊之學。

〔訓読〕

古人の琴瑟・簡編は是れ學に非ざるは莫し。板築・魚塩は聖と作るの地に非ざるは莫し。且つ詩を歌ふの一事の如きは一歌の間に直ちに聖人の地位に到る。若し良知上に功を用ふるを解さざれば、縦ひ歌ひ（得）盡くすこと法度の如きも、亦た只だ是れ歌工の人を悦ばすのみ。若し是れ良知此の歌に在れば、真に是れ瞬息の間に邪穢蕩滌し、渣滓消融し、直ちに太虚と体を同じくす。方に是れ自慊の學なり。

〔語釈〕

○琴瑟・簡編 琴瑟はこととおおごと。簡編は書物。

○板築・魚塩 板築は城壁築造、魚塩は魚塩販売をいう。『孟子』告子下に「傳説は版築の間に挙げられ、膠鬲は魚塩の中に挙げらる」とある。

○法度 手本、模範。

○歌工 歌い手。

○瞬息 きわめて短い時間。

○邪穢 よこしまなことやけがれたこと。

○蕩滌 あらい清めること。

○渣滓 おり、かす。

○自慊 自分自身満足すること。『大学』誠意章に「此れを之れ自ら謙くすと謂ふ」とある。「謙」は「慊」の借字。

〔校異〕

○蕩滌 「狩野文庫本」(「吉田氏所蔵本」)は「蕩瀾」に作る。

【三三三】

歌詩之法直而温、寛而栗、剛而无虐、簡而无傲。歌永言、声依末而已。其節奏抑揚、自然与四時之叙相合。

〔訓読〕

詩を歌ふの法は直にして温、寛にして栗、剛にして虐無く、簡にして傲無し。歌は永言し、声は末に依るのみ。

其の節奏の抑揚は、自然と四時の叙と相ひ合す。

〔語釈〕

○栗 きびしさ、威嚴。

○歌永言、声依末而已 「末」は「永」の誤り。「歌永言」とは人が心に思っていることを長い音にし、「声依末」はその長い音によつて調子を整えること。『尚書』堯典に「詩は志を言ひ、歌は永言し、声は永きに依る」とある。

○節奏 音楽の音の調べがよく整っていること。また、調べ。

○四時之叙 春夏秋冬の順番。

〔校異一〕

○歌永言、声依末而已 「狩野文庫本」（「吉田氏所藏本」）は「末」を「永」に作る。

【三四】

丙戌春莫、師同諸友登香炉峯各盡足力所至。惟師与董蘿石王正之王惟中数人、至頂。時師命諸友歌詩、衆皆喘息不定。蘿石僅歌一句、惟中歌一章。師復自歌婉如平時。蘿石問故。師曰、我登山不論幾許高、只登一步。諸

君何如。惟中曰、弟子輩、足到山麓時、意已在山頂上了。師曰、病是如此。

〔訓読〕

丙戌の春莫、師、諸友と共に香炉峯に登り各々足力の至る所を盡す。惟だ師と董蘿石・王正之・王惟中の数人のみ、頂に至る。時に師、諸友に命じて詩を歌はしむるも、衆皆な息を喘ぎて定まらず。蘿石僅かに一句を歌ひ、惟中一章を歌ふのみ。師復た自ら歌ふこと婉として平時の如し。蘿石故を問ふ。師曰く、我、山に登るに幾許の高きを論ぜず、只だ一步を登るのみ。諸君は何如、と。惟中曰く、弟子輩、足、山麓に到るの時、意已に山頂の上に在(了)り、と。師曰く、病是れ此の如し、と。

〔語釈〕

○丙戌 嘉靖五年(一五二六)。

○春莫 莫は暮に同じ。晩春のことをいう。

○香炉峯 江西省九江県の南西にある廬山峰の北峰。

○董蘿石 六条に既出。

○王正之 未詳。あるいは黄正之の誤りか。黄正之については一〇条参照。

○王惟中 未詳。

〔校異〕

「狩野文庫本」(「吉田氏所藏本」)との字句の相違はない。